

インターネット俳誌/SEIGETU

# 清 月

2月中の出句 20名 延べ572句



第163号 平成26年 2月

## 二句一章(言葉の取り合せ)

ゆたか

俳句で言う二句一章は、二つの像(言葉)や状態を組み合わせて、二つの章で一句を構成するという作句方法を表す言葉です。

この作句方法は、二つの言葉の響き合いや複合的な情趣を醸させる方法として効果的であり、近年、多くの作者により用いられています。

二つの取り合せがありふれたものであると、月並みな作品となり、離れすぎると、意味不明な作品となります。

この取り合せは、読者がこれとは思いう意表をついた新鮮な取り合せに努めたいものです。

〔今月の二句一章作品から〕

青海苔の干網並び潮静か 清水恵山

青海苔から河口の汽水域と潮静かから生産者の平和な生活の様子が響きあって、俳趣を拡げています。

引絞る駒の手綱や頼朝忌 橋本幹夫

頼朝の死は、落馬が原因と言われている。手綱操作との取り合せにより、馬術の名手の頼朝の死を悼む気持ちにより増幅されてきます。

鶯娘狂ふがごとく春の雪 池下よし子

雪中に鶯が娘に姿を変じて舞う舞踊(歌舞伎)と春の雪の取り合せにより、僅かな風に牡丹雪が激しく舞っている景が醸し出されます。

以上

目次

近詠	2
雑詠選	3
寸感	9
十句選	10
十句選	11
十句選	12
十句選	13
十句選	14
十句選	15
十句選	16
十句選	17
十句選	18
十句選	19

  

ゆたか	2
ゆたか	3
ゆたか	9
恵山	10
幹夫	11
よし子	12
山溪	13
宏一	14
美琴	15
伸義	16
省司	17
幹史	18
順一	19

近詠

野田ゆたか

大琵琶に日がな吹き荒ぶ春疾風  
酒肴など獺の祭のありやうに  
旧正や刻を忘れし古時計  
春雪の油断ならざる降り様に  
暁光に梅林仄と覚めゆける



雑詠

(太字は秀句)

ゆたか選

青海苔の干網並び潮静か 千葉 清水恵山  
 初音かな声それぞれにあどけなく 同  
 蒼み初む箱根末黒の芒かな 同  
 欠礼を詫びつつ二月礼者かな 同  
 水音の日毎に高し猫柳 同  
 引絞る駒の手綱や頼朝忌 岡山 橋本幹夫  
 海女どもの四方山咄磯竈 同  
 恋猫の修羅や火宅を嘲笑ふ 同  
 獺祭妣に見倣ふ几帳面 同  
 国栖奏や水嵩増せる吉野川 同

鷺娘狂ふがごとく春の雪 吹田 池下よし子  
 太陽の塔早春の貌なせり 同  
 ジョギングの靴軽やかに春兆す 同  
 おほかたは木々錆色の梅二月 同  
 春愁ふ残念石の謂れかな 同  
 はだれ野や轟き奔る長良川 岐阜 石崎そうびん  
 着ぶくれて堂守の婆口達者 同  
 窯出しの白磁大皿風光る 同  
 宇治橋を渡りきる間の春の雪 同  
 陶片の散らばる丘に梅探る 同  
 春光や鯉と分け合ふパンの耳 愛知 足立山溪  
 地吹雪やガイドの跡を黙々と 同  
 パソコンのキー打つ音や春の雪 同

散歩道の轍に光る薄氷 愛知 足立山溪  
 寒月や鎮守の杜の木々揺れて 同  
 春寒も見渡すかぎり日の光 大阪 木村宏一  
 春さぐる立木の枝の空高く 同  
 枝垂梅紅白そろふ門構 同  
 春浅し砂かむ引戸風さわぐ 同  
 空香る蠟梅の庭なりしかな 同  
 東の間の青空消えし春時雨 三重 山口美琴  
 探梅や記憶にありし一軒家 同  
 春立つもまだ遠からん結果待つ 同  
 節分の遠く聞こゆる子らの声 同  
 春障子開けて陽の入る独り言 同  
 魚溜に落ちて花咲く桜鯛 千葉 田村公平

清水の余寒見下ろす大舞台 千葉 田村公平  
 街の灯も灯台の灯も朧かな 同  
 下萌や背中はみ出すランドセル 同  
 舷窓で文庫本読む菜の花忌 同  
 野焼の火真つ赤に染むる日暮かな 三重 後藤允孝  
 もののふの戦の跡やおぼろ月 同  
 節分や誰が鬼かとあみだ籤 同  
 山焼や炎と怒号入り交じり 同  
 春寒や迷路に入りて抜けられぬ 同  
 村営のロープウエーや雪景色 大阪 山縣伸義  
 らふばいの垣根越えくる匂かな 同  
 昼すぎて雨にかはりぬ春の雪 同  
 垂直に湖底めがけて魃を挿す 同

薄氷や人の情けにすがり生く 大阪 山縣伸義  
 焼跡の灰黒ぐろと露の臺 静岡 渡邊春生  
 石垣の高きに梅の咲きにけり 同  
 風光る野面積みなる峽の畑 同  
 剪定の暴るる枝を束ねけり 同  
 春近し旅の雑誌を二三冊 大阪 森戸しゅじ  
 舞ひながら微かな風となる小雪 同  
 春を待つ装幀の美しき本 同  
 雪搔きの径一筋に駄までへ 愛知 駒田暉風  
 紅梅の影を映した白障子 同  
 独り居の庭に舞くる梅の花 同  
 拾ふこと思ひ手加減福は内 千葉 筒井省司  
 水温む弁財天の水路かな 同

早梅を訪ね 一万八千歩 千葉 筒井省司  
 うがいするコップに満てり寒の水 鳥取 瀬尾睦夫  
 帰りきて風呂へ飛び込む余寒かな 同  
 冬薔薇の咲ひて花瓶を探しけり 同  
 早春のささやく風の駅舎かな 東京 橋本幹史  
 春菊を刻む香りに亡き母を 同  
 雪崩来て雲なき空と広野かな 同  
**鎌倉は人で溢れる実朝忌** 神奈川 梅津弘子  
 梅林の香を浴びつつ友と旅 同  
 春寒や鐘の音は全部強く鳴り 愛媛 石川順一  
 ボールペン二本の重み冴返る 同  
 立春の空青ければなおのこと 山梨 志村万香

寸感

ゆたか

青海苔の干網並び潮静か 恵山

卷頭言のとおり。

引絞る駒の手綱や頼朝忌 幹夫

卷頭言のとおり。

驚娘狂ふがごとく春の雪 よし子

卷頭言のとおり。

はだれ野や轟き奔る長良川 そうびん

春の闌け行く斑雪野と雪解水が加わり豊  
に流れる長良川との取り合せが程よく斑雪  
の詩情を醸す。

章の行間に、動き始める野の田畑や遡上  
してゆく鮎の景までが連想させる。

春光や鯉と分け合ふパンの耳 山溪

春光と鯉の取り合せが程よく鯉と遊ばれ  
ている作者の様子が心地よく伝わってくる。  
章の行間に、餌を口にする鯉の動きによ  
り生まれる水輪がきらきらと光る景が連想  
させる。

春寒も見渡すかぎり日の光 宏一

春寒と日の光の取り合せにより寒さが残  
るものの日差しは春という景が広がる。

章の行間から春の暖かさは未だ先である  
が、本格的な春を待っている気持ち伝わ  
ってくる。

焼跡の灰黒ぐると露の臺 春生

焼跡(野焼跡)と露の臺の取り合せはやや  
付きすぎであるが、作者の位置と露の臺の  
所在場所が明確となった。

章の行間に、野焼きの労や露の臺の生へ  
の逞しさが見えてくる。

鎌倉は人で溢れる実朝忌 弘子

虚子の句の「鎌倉に実朝忌あり美しき」  
がよく知られている。  
観光客や寺社詣客・俳人や歌人の増える  
実朝忌頃の鎌倉の様子がよく伺える。

### 共感一〇句

### 清水恵山選

再建の獅子庵の庭梅一輪 石崎そうびん

吹きさます奈良の茶粥や春浅し 同

野球なら素直に聞く子草青む 田村公平

春光や鯉と分け合ふパンの耳 足立山溪

義仲忌翁寄り添ふ古刹かな 橋本幹夫

手始の男の料理菜飯かな 山縣伸義

還暦を迎へる朝や息白く 瀬尾睦夫

薄氷の張りたる池の鯉の影 後藤允孝

節分の遠く聞こゆる子らの声 山口美琴

春めくやとんがり屋根の我が駅舎 池下よし子

共感一〇句

橋本幹夫 選

通ひ路の餌付けの家や春の猫 山口美琴  
雪解けの河口に鳥の低く舞ふ 清水恵山  
山里の風移ろひて春日入る 後藤允孝  
神苑や巫女振向きて梅の花 木村宏一  
舫ひ舟ぶつかる冬の長良川 石崎そうびん  
大琵琶の湖に抱かれて魴を挿す 山縣伸義  
野仏の真つ赤な帽子春の雪 池下よし子  
舞ひながら微かな風となる小雪 森戸しゅじ  
雪散らす梢の二羽の小さき鳥 足立山溪  
マネキンのはみ出す手足街は春 田村公平

共感一〇句

池下よし子 選

舞ひながら微かな風となる小雪 森戸しゅじ  
遠山に銃の罨や猟名残 清水恵山  
春光や鯉と分け合ふパンの耳 足立山溪  
窯だしの白磁大皿風光る 石崎そうびん  
春寒も見渡すかぎり日の光 木村宏一  
引き絞る駒の手綱や頼朝忌 橋本幹夫  
風光る野面積みなる峡の畑 渡邊春生  
探梅や記憶にありし一軒家 山口美琴  
躊躇わず船乗りと決め卒業す 田村公平  
鎌倉は人で溢れる実朝忌 梅津弘子

共感一〇句

足立山溪 選

春近し旅の雑誌を二三冊 森戸しゅじ  
窯出しの白磁大皿風光る 石崎そうびん  
海女どもの四方山咄磯竈 橋本幹夫  
もののふの戦の跡やおぼろ月 後藤允孝  
清水の余寒見下ろす大舞台 田村公平  
焼跡の灰黒ぐろと露の臺 渡辺春生  
野仏の真つ赤な帽子春の雪 池下よし子  
両足にリズム取りつつ麦を踏む 清水恵山  
枝垂梅紅白そろろう門構 木村宏一  
梅林や親は香を愛で子は茶店 山口琴美

共感一〇句

木村宏一 選

舞ひながら微かな風となる小雪 森戸しゅじ  
紅梅の影を映した白障子 駒田暉風  
海女どもの四方山咄磯竈 橋本幹夫  
地吹雪やガイドの跡を黙々と 足立山峽  
野仏の真つ赤な帽子春の雪 池下よし子  
束の間の青空消えし春時雨 山口美琴  
薄氷や光を乗せて浮御堂 清水恵山  
拾ふことと思ひ手加減福は内 筒井省司  
野焼の火真つ赤に染むる日暮かな 後藤允孝  
薄氷や溜池に描く抽象画 山縣伸義



共感一〇句

山口美琴 選

ジヨギングの靴軽やかに春兆す 池下よし子  
鷺娘狂ふがごとく春の雪 同  
春寒も見渡すかぎり日の光 木村宏一  
梅二月やさしき風に野の香り 橋本幹夫  
窯出しの白磁大皿風光る 石崎そうびん  
早梅を訪ね一万八千歩 筒井省司  
野焼の火真つ赤に染むる日暮かな 後藤允孝  
旅なれば摘まずにおこう露の臺 山縣伸義  
冬薔薇の咲ひて花瓶を探しけり 瀬尾睦夫  
春菊を刻む香りに亡き母を 橋本幹史

共感一〇句

山縣伸義 選

水仙や眉目うるはしき理系女子 池下よし子  
野仏の真つ赤な帽子春の雪 同  
二ん月の月は細身でありにけり 橋本幹夫  
春氷ふはりとオンザロツクかな 同  
餅花へ触れんばかりに舞扇 石崎そうびん  
冴返る素足にかかる気合かな 木村宏一  
リハビリの妻を待つ間の余寒かな 筒井省司  
早春の光に舞へり堰の水 清水恵山  
ジャンプして氷上に舞ふ人となる 森戸しゅじ  
通院の妻の身支度春めきて 筒井省司

共感一〇句

筒井省司 選

探梅や記憶にありし一軒家 山口美琴  
節分の遠く聞こゆる子らの声 同  
淡雪の解けて小路の石畳 池下よしこ  
お点前の柄杓置く音冴返る 同  
節分や誰が鬼かとあみだ籤 佐藤充孝  
川巾になお余裕あり春の水 同  
春の雪一輪挿してなごむ朝 木村宏一  
手術着が肌に馴染まず冴え返る 田村公平  
草餅は故郷の色母の味 石崎そうびん  
悪童のひとときわ高き卒業歌 渡邊春生

共感一〇句

橋本幹史 選

おほかたは木々錆色の梅二月 池下よし子  
菩提寺の苔なめらかに椿落つ 足立山溪  
還暦を迎へる朝や息白く 瀬尾睦夫  
お隣も老いの夫婦や梅ふふむ 清水恵山  
空香る蠟梅の花ありしかな 木村宏一  
枝の影動くことなし寒の水 石崎そうびん  
木の実植う背に白濤の日本海 橋本幹夫  
一筋の踏み跡続く深雪晴 田村公平  
石垣の高きに梅の咲きにけり 渡邊春生  
試験終へほつと一息冴返る 後藤允孝

共感一〇句

石川順一選

雪残る東尋坊の窪みかな	橋本幹夫
大厄を落としてくぐる鳥居かな	同
ジグザグの道行く碧梧桐忌かな	同
もののふの戦の跡やおぼろ月	後藤允孝
柔らかな春色と呼ぶ風掬ひ	同
探鳥の岸辺にカメラ水温む	池下よし子
お点前の柄杓置く音冴返る	同
野球なら素直に聞く子草青む	田村公平
雪搔きの径一筋に駅までへ	駒田暉風
杉の実を植う千年の未来かな	山縣伸義

インターネット俳句 清月  
第163号  
平成26年2月中の出句から

発行  
平成26年 3月20日

主宰 兼 編集  
野田ゆたか

発行所  
枚方市 大阪清月庵

清月俳句会のホームページ  
[https://haiku575.info/seigetukai/  
home/homu.htm](https://haiku575.info/seigetukai/home/homu.htm)